2021 年度　東京理科大学　内部質保証に係る外部評価　実施報告

１．内部質保証に係る外部評価　概要

本学において現在展開している内部質保証システムの適切性の点検・評価を行い、内部質保証を効果的に推進することや当該システムの高度化を図るとともにその充実につなげることを目的として、評価員を委嘱した外部有識者 3 名に対して、以下の 3 点について諮問した。

- 本学の自己点検・評価に係る事項
- 本学の内部質保証システムに係る事項
- 本学の長所・特色に係る事項

評価員から書面による評価結果を受領した後に、これを基にした意見交換会を開催した。

２．意見交換会　記録

（１）開催概要

日　時：2021 年 12 月 13 日（月）9 時 30 分～11 時 5 分

場　所：東京理科大学神楽坂キャンパス

出席者：（評価員）独立行政法人大学改革支援・学位授与機構　参与　岡本和夫　氏
リクルート進学総研所長、カレッジマネジメント編集長　小林浩　氏
東京大学教育学研究科大学経営・政策コース　教授　両角亜希子　氏
（本　学）岡村総一郎学長事務取扱、渡辺一之副学長（自己点検・評価担当）
（事務局）市川学務部長、青山大学評価・IR 室長、増田大学評価・IR 室係長、
藤田大学評価・IR 室係長

（２）書面評価結果概要及び意見交換内容（抜粋）

① 本学の内部質保証システムについて

＜書面評価結果概要＞

本学の内部質保証システムでは、自己点検・評価から改善までのプロセスが組織的に行われており、特に内部質保証推進に責任を負う組織である大学質保証推進委員会（以下「推進委員会」という）の活動について、改善活動に関する点検や各部局へのフィードバックを丁寧に行っていること、推進委員会の議事を本学ホームページで公表していること等について、長所・特色としたうえで、今後も継続することが重要であるとの提言があった。

これを踏まえて、今後のさらなる発展に向けては、重要なステークホルダーである学生や卒業生の声を内部質保証システムに活用する仕組みを構築するとともに、そこで得た意見・要望等を活かした改善計画の策定・改善結果のフィードバックの方法等を検討する必要があるとの提案があった。

＜意見交換テーマ：ステークホルダーとの関わり（学生の内部質保証システムへの参画）＞

（以下、●：本学、○：評価員）

●現在、内部質保証システムにおけるステークホルダーの参画は、推進委員会委員や外部評価の評価員を委嘱している学外有識者のみであり、その他のステークホルダーからの意見聴取の機会は設けていない。今後、ステークホルダーである学生や卒業生から内部質保証システムへの参画を得たい場合、どのような仕組みづくりを行うことが望ましいか。

○学生が内部質保証に関わることや学生の意見を大学の運営に反映することは、今後多くの大学において行われる取り組みである。他大学の事例として、部局における自己点検・評価の段階で学生の意見を取り入れており、当該大学の理念や教育目的とも合致している取り組みがある。学生を内部質保証システムに参画させる場合は、貴学としてどのような理念の下に実施するのかを考える必要がある。

○当該大学の教育を受けている学生の声を聴いて議論する場を設けている大学もある。これに参加する学生は、選抜され、大学の取り組みや理念等を勉強しているため、教員側に緊張感を与えている。

○別の他大学では、新たなビジョンを策定する際に、大学と、学生を含めたステークホルダーとの対話を重視し、その機会を数回設けている。熱心な学生は、大学の運営に関わる経験を通して大学との一体感を感じる機会となるようである。

●本学の伝統として“実力主義”がある。昨年度、学内から意見を募り、実力主義について、『次代に向けた「東京理科大学の実力主義」』（以下、「新実力主義」という）として再定義を行った。そのポイントとしては、“教員が何を教えるか”から“学生が何を学び得たか”へのシフトである。これを学生に浸透させ、学生自身が“何を学ぶべきか”を考え、学びの成果を得てもらいたい。

●本学全体において、学生が修得してこそ価値があるという意識への変革が必要である。

○学生の本音は、あらゆる機会に提出する意見に対するフィードバックがないことである。学生が大学からのフィードバックを実感できるようになるとよい。

② 本学の自己点検・評価について

＜書面評価結果概要＞

推進委員会が策定する自己点検・評価の基本方針等に基づき、各部局において自己点検・評価及び改善活動を行い、これを受けて推進委員会を中心に明らかとなった課題の改善に向けて検証等を行い、全学の内部質保証に繋げることができていることの評価を得た。

一方で、法人・大学として掲げている TUS Vision 150 や 3 か年中期計画と自己点検・評価及び改善活動との関連については不明であり、各部局がどの程度達成状況等を理解できているかが重要であるとの提言があった。

＜意見交換テーマ：3 か年中期計画と自己点検・評価及び改善活動（自己点検・評価）の結

びつき＞

（以下、●：本学、○：評価員）

●3 か年中期計画は、4 つの機構を中心に半年ごとに振り返りを行っている。また、各機構は部局として自己点検・評価を実施し、自己点検・評価報告書（以下、「報告書」という）を作成している。3 か年中期計画の振り返りは大所高所から見て行う一方で、報告書はより具体的な取り組み自体に着目して行うという考え方である。

○学内で作成する資料について、文部科学省の施策や公益財団法人大学基準協会の認証評価に対応して個別に作成されており、資料の種類が大変多くあるように見受けられる。学外からは、単純に、常に向上していることが把握できればよいのではないか。

●正確かつ詳細に資料を作成することに重きを置いて、各文書の記述の精度を高めていることもあり、説明する文章は長くなる傾向はある。まずは、教職員や学生が理解しやすいように、簡潔に表現する必要がある。

○自己点検・評価等においては、十分な文章量で、大変丁寧に行っている。これによる学内関係者の疲弊が心配である。学外から見える情報については、シンプルな表現でよい。また、学内外のステークホルダーに向けて直接説明し、質問を受けるような機会を設けることもよい。

○貴学では独自に掲げた目標に向けてよく取り組みを進めているため、他大学との比較という方法で成果を実感し把握することもできる。また、KPI については、パーセンテージ等の数値目標が立てられない事項については、質的な評価を数値化して表現することも KPI であると理解して目標を設定してほしい。

③ 本学の長所・特色について

＜書面評価結果概要＞

今回の外部評価において、本学の長所・特色に関する助言を得たく、本項目を新たに設定し、本学の内部質保証システム、教育・研究活動等の取り組みについて、今後も本学により適切な方法で丁寧に継続して行うことの提言があった。書面評価結果において挙げられた事柄については、本学に期待されることであると認識した。

＜意見交換テーマ：学修ポートフォリオシステム等による学習成果の可視化と実力主義＞

（以下、●：本学、○：評価員）

●先般、本学では実力主義を再定義した。現在、学修ポートフォリオシステムの機能の改善に向けて、各施策を実施しているが、学生自身が、学修ポートフォリオシステム等による学習成果の可視化を通じて新実力主義に掲げた能力を身につけられたかを自覚するためには、学生が学習成果の可視化の結果をどのように有効な情報として自覚するかがポイントである。学習成果を可視化することにより新実力主義を検証できる可能性はあるが、例えば卒業生に対する追跡調査を行い、新実力主義に掲げる能力が身に付いているかを

確認することは非常に大変なことである。

○理工系の大学の場合、各研究室における“実験ノート”等において、修得したこと、修得できなかったこと、その後の対応の状況等は記録しているのではないか。これの活用の仕方を工夫してはどうか。

●学修ポートフォリオシステムからディプロマ・サプリメントに繋げることができれば、同システムへの入力率を向上できるとともに、学生が就職活動をする際に、企業に対して具体的に学習成果に関するエビデンスを示すことができると考えている。

○他大学の事例として、カリキュラム上必須としている留学の条件として TOEFL の基準スコアを設定しており、その条件を満たせない場合は留年してしまうため、1～2 年生は苦労している。しかし、その結果、当該大学の学生は企業から高い評価を得ている。貴学の新実力主義に関する学外への発信方法として、厳しい教育を突破した学生であることをストーリーとして示すと理解されやすいのではないか。質の保証にもつながる観点である。

○学生が能力を自覚する方法としては、学生へのフィードバックの実施である。学生に対してアンケートを実施し、その学部において涵養したい能力の修得状況について、例えば 1 年ごと等在学している途中の段階で確認し、不足している部分を発見できるとよいのではないか。

●先般、学修ポートフォリオシステムにおいて、個々の学生に対してフィードバックできるような仕組みを構築した。このような取り組みはこれまでできておらず、学習成果を自覚させられていなかった原因でもある。

○現在、国立大学の 4 年間での卒業率は 80 パーセント程度であるが、過去には 50 パーセント程度であった大学もある。当該の大学では、カリキュラム上必須である 2 度の留学のうち、2 度目は 4 年生で就職活動と重なるタイミングであったため、結果として留年せざるを得ない状況であったが、学生の事情を理解できれば卒業率の低さ自体は問題ないことが理解できる。このように単に数字だけで評価できないことは数多くある。

○貴学では成績評価は厳しいが、学生を育てるシステムがあることを合わせて広報しなければならない。

○松下佳代氏（京都大学）の考え方で“PEPA”（ペパ）がある。毎年学年ごとに基幹となる科目について評価を実施することとしており、学位授与方針に定めている修得すべき能力について、教員、学生それぞれが評価する仕組みとしている。始めは両者の評価結果にずれが生じるが、徐々に一致するとのことで、4 年間の進歩を確認できる取り組みである。

＜意見交換テーマ：長所・特色を見出す方策＞

●先般、本学が受審した機関別認証評価において、大学基準のうち「基準 2：内部質保証」において長所を得ることができたが、内部質保証の目的の中心である「基準 4：教育課程・学習成果」においては、自己点検・評価による長所を本学から数点挙げていたものの、長

所の獲得に至らなかった。現在の内部質保証システムを活用しながら、長所・特色をより幅広く認識することや優れた取り組みの伸長を促すこと、長所・特色の発信することができる仕組みづくりを行うためのヒントがあるとありがたい。

○提言としての長所を獲得するためには、成果が上がっていることや理念や目的の実現に資することが必要である。例えば、新実力主義について、これを実現するための教育プログラムがあり、今後その成果や学生によるアンケート結果を活用し、学生がこれを認識していることを説明できるとよいのではないか。

【当日の様子】

※　以上の意見交換は主だった内容を抜粋しており、この他にも個別の施策や取り組み等について意見交換を行っている。

３．むすびに

今回の書面評価結果及び意見交換の内容は、本学の内部質保証システムについての客観的な視点を踏まえた貴重な意見として、今後、内部質保証システム自体の PDCA サイクルに反映させ活用することとしたく、学内手続きを経て本学ホームページに公表するとともに、外部評価の結果を受けて改善を要すると判断した事項について、推進委員会においてその改善方法等を検討するよう依頼を行っている。

以　上